## 岩日本大震災で被災した本国の住宅調査

地震、津波による被害が甚大、原子力発電所の事故が発生した岩日本大震災の「住宅調査報告」が、ダ・ヴィンチ・ジャパン、ハウジング・ジャパン、国際開発センターの調査員4名による「住宅調査報告」として、ハウジング・ジャパンに、ご掲載されました。

写真は、調査チームが日本の住宅調査を行っている様子。（2011年6月末）
写真は、ハウジング・ジャパン誌「住宅調査報告」より。 住宅調査報告書はこちら

### CIDB調査報告における調査対象

| 調査対象 | 調査戸数 | 住宅タイプ（一戸建て、アパート、長屋） | 一戸建て住宅 | アパート | 長屋住宅 |
|---|---|---|---|---|---|
| 釜石市 | 1,024戸 | 1,024戸 | 1,024戸 | 0戸 | 0戸 |
| 宮城県 | 1,024戸 | 1,024戸 | 1,024戸 | 1,024戸 | 0戸 |
| 福島県 | 1,024戸 | 1,024戸 | 1,024戸 | 0,768戸 | 0,256 |
| 合計数 | 3,072戸 | 3,072戸 | 3,072戸 | 1,792戸 | 0,256 |
| 比率 | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 58.3% | 8.3% |

調査対象の住宅タイプ（一戸建て、アパート、長屋）の比率は、釜石市、宮城県、福島県の3つの地域で、ほぼ同一の比率となっています。

### 2. 世界銀行への日本政府の要請書の第三調査団。

（日本政府は日本の住宅調査を世界銀行に要請。）

いわき小名浜港から
本国支援調査団で「ドキュメント」

写真は、日本政府の要請書を世界銀行に提出。（2011年6月末）
写真は、ハウジング・ジャパン誌「住宅調査報告」より。 住宅調査報告書はこちら

「ドキュメント」の調査チーム。（2011年6月末）
写真は、ハウジング・ジャパン誌「住宅調査報告」より。 住宅調査報告書はこちら

## 避難所から住宅へのプラン」として「応急仮設住宅」

災害で住を失った人たちは、応急仮設住宅に入ったり、自分で住宅を探したりしなければならない。そこで、ダ・ヴィンチ・ジャパンは、「被災者の住宅」、「被災者の住宅」、「被災者の住宅」

# 大分の木造文化財に学び、組み上げる「板倉構法」

写真左：正倉院　写真右：伊勢神宮内宮（皇大神宮）

「板倉」とは、日本古来の神社や御物倉庫を造ってきた優れた木造建築技術です。この構法で木造応急仮設住宅をつくることを提案し、実現したのが、この構法の発及をめざしてきた、安藤邦廣筑波大名誉教授です。柱と柱の間のスリットに厚板を落とし込んで建物の構造をつくる板倉構法は、木材のすぐれた特性を活かす伝統的な木造技術のひとつです。

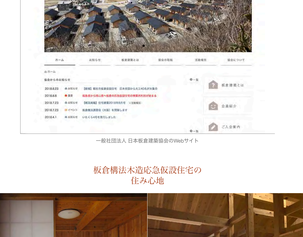
板倉の仕様（**日本板倉建築協会**より）

安藤邦廣さんは、壁にも、床にも、屋根にも厚板を多用する、材積の大きい「板倉構法」を一般の住宅に応用することが、日本の山の木材資源の有効活用となり、山の健全で持続的な循環につながると考え、早くから「板倉構法による住宅」づくりを手がけてきました。

## 板倉構法普及のために大臣認定を取得、講習会を開催

安藤さんの考えに賛同した仲間が、全国中小建築工事業団体連合会、NPOの木建築フォラム、全国建設労働組合総連合の３団体は、「板倉構法による住宅」をつくりやすくするために、標準化した仕様をつくって大臣認定を取得しようと、共同で事業を立ち上げました。

性能検証実験を重ね、まず、耐震性能については「木造ラ ウィブ」で壁倍率最大2.2倍、「残付きパネル式」で最大3.4倍の耐力壁として、2005年に国土交通大臣認定を取得。防火性能については、2007年「木造ラ ウィブ」で外壁の防火構造の国土交通大臣認定を取得。これで、2階建てまでの住宅において、準防火地域、法22条区域の延焼のおそれのある部分の外壁を、木材だけで構成した落とし込み板壁で設計・施工することも可能となりました。




木造板倉建築の大臣認定仕様の図（全国建設労働組合総連合のWebサイトより）

福島県が地元工務店に公募する応急仮設住宅建設事業として、いわき市と会津若松市に建設された板倉構法の応急仮設住宅も、上記の大臣認定仕様を踏襲して造られました。

その後、2014年に故安藤さんが代表理事となり、　日本板倉建築協会（以下、板協）を設立。大臣認定を取得した「板倉構法」の施工マニュアル作成、板倉講習会を各地で開いて普及につとめています。また、温熱環境実証実験、次世代省エネ基準に対応する高断熱板倉構法の研究開発、板倉小屋キット等の商品開発など、さまざまな研究開発も進めています。

一般社団法人 日本板倉建築協会のWebサイト

## 板倉構法木造応急仮設住宅の住み心地

板倉の応急仮設住宅の内部（**日本板倉建築協会**より）

仕上がった板倉の応急仮設住宅の内部は、こんな感じ。それぞれの住戸にキッチンセット、板張りのトイレ、ハーフユニットの風呂がついています。建坪は住戸タイプに応じて7～12坪。大きくはありませんが、気持ちのいい木の空間です。鉄骨プレハブ住宅の内部とはずいぶんちがって「仮設」という、わびしい感じはなく、木のぬくもりに満ちています。

そう広くはないとはいえ、木組みの構造材が真んゆにあり、はしごでのぼれるロフトがあり、空間的には、平屋のプレハブ鉄骨住宅のような狭苦しさはありません。実際に、いわきでこの板倉構造の応急仮設住宅に住んでいた人の「感さ ननしました」（忘て行くのがさびしい）という声も多かったそうです。

安藤さんは、この板倉応急仮設住宅がいわきから被災に移転することについて、そうなると予感していたそうです。「本設住宅なら、次の木造応急仮設住宅として再利用することは、最初から考えていました。ボルト以外の金物や接着剤を使わない伝統的なつくり方だから、解体移設には向いているしね」

「仮設に住まなければならない状況だからこそ、木のあたたかみのある空間ではっとしてほしいと思います。そして、板倉構法というのは、伝統木造のわりに構造がシンプルで、建てるのは簡単なんです。だからこそ、被災地に板倉を建てていきたい」という安藤さんの願いは、いわきでの応急仮設住宅としての供与期間が満了となって間もなく、西日本豪雨で被災した岡山県被社市からの要請で実現することとなるのでした。

木の家ネットの機関紙会に参加された安藤邦廣さん

といっても、解体したお打ぢが岡山県被社市に行って、板倉構法の家が建つわけではありません。そのノウハウをもつ工工たちが行って、被社市の大工チームにつないではじめて、移設は実現するのです。

ここに登場するのが、木の家ネットの会員でもある大工、杉原敦さとマイケル。東日本大震災発生後、さまざまな縁で安藤さんと出会ったことから、７年前にいわき市での板倉応応住宅建設にどっぷり関わったマイケルに、安藤さんは「被社市の被災工事の人員めに協力してほしい」と依頼します。こうして、入から人へ、マイケルにつながる大工たちが、被社での移設工事にかけつけることになるのですが、その詳細は、次回、**板倉応急仮設住宅移設特集の第三弾**にゆずります。どうぞお楽しみに！

マイケルこと、杉原敦さん

Like 0　ツイート

関連する記事はこちら

NPO法人木造フォラム 大工・金回先原点よりも「近いやね建築」・幸せをつくる大工

3.11後を支援するコミュニティーの力　竹原幸絵 福島県より

五月雨！あのアサキエメイが家を建てる現場見学

伊勢神宮遷宮・現地始祭り：300年の大木を伐る！

事務局
〒171-0066
岡山県豊島市豊島下2-6-1丁目1-3
元島会内
mail：jimukyoku@kinoie.net
tel：086-486-5464



© 無人がつくる木の家ネット /Tsukuru-ga Tsuku KINO-HE not. All rights reserved.